



Title	シュレーディンガーの猫 : あるいは記憶の映画論 2 : 細田守の 《時をかける少女》
Author(s)	三宅, 昭良
Citation	人文学報 表象文化論(461): 51-87
Issue Date	2012-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10748/5345
Rights	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher



TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY

首都大学東京

<http://www.tmu.ac.jp/>

シュレーディンガーの猫

あるいは記憶の映画論 2：細田守の《時をかける少女》

三宅昭良

1. シュレーディンガーの猫？

今年も夏が終わろうとしている。照りつける太陽がまぶしい。空は青く深い。雲は白く近い。頭上から降りかかってくる蝉の狂騒。真昼の公園には誰もいない。木陰の涼しさと舗装道路の照りかえし。人と会い、人と別れ、話し、笑い、歌い、眠る。そうした夏はまたひとつ過去のものとなり、さらに遠い過去の記憶とないまぜになり、見定めがたく消えてゆく。だが、これから論ずるアニメ版《時をかける少女》はそのような夏の記憶とは別種の、忘れようにも忘れられない、そして忘れてはならない記憶の物語である。

誰もが知るとおり、『時をかける少女』は筒井康隆のジュヴナイル小説であり、この短編を原作として、これまでいくつかの映像作品がつくられている。その数は予想外に多く、六〇年代半ばに書かれたこの小説は、十年に一度はかならずテレビドラマか映画になり、今世紀に入るとじつに四度、映像化されている。アニメ版《時をかける少女》はその七作目にあたる¹。

それら全作品を小論で扱うことは極めて困難であるし、焦点がぼけるだけで有益ではない。さいわいにして、そうした作品群を論じた『「時をかける少女」たち』（以下、『少女」たち』と略す）という労作がある。だから多くはそちらに譲ることにして、ここでは主として、『少女」たち』が刊行されたのちの作品であるアニメ版《時をかける少女》の世界と記憶の構造を探ってみたいと思う。その際、原作と大林版に関して『少女」たち』に対する異論を交え、また同作が指摘していない論点に触れることにもなる。

だが、それにしてもなぜ本論には「シュレーディンガーの猫」というタイトルがついているのか。それはいったい何か。

アニメ版《時をかける少女》の山場は、千昭が時間を止めて真琴に自分が未来人であることを明かし、別れを告げる場面であるが、そこに奇妙なものが映る。駐車場に停められた多くの車、無邪気に公園で遊ぶ子供たち、餌をついばむ鳩たち、通学する大勢の学生たちの後ろ姿、都会の空を舞う鳥の群れ、プールで遊ぶ夥しい家

族連れ、浴衣姿の女性たち等々、現代社会の何気ない幸福の風景が停止した時間の断面にとらえられ、未来への不安を暗示して映じられるその隙間に、段ボール箱に入った黒猫と薬品の瓶とトンカチ、それに携帯くらいの黒い計測器が4秒ほどうつる。監督・細田守はあるところで、これが「シュレーディンガーの猫」と呼ばれる量子力学の思考実験の絵であることを説明し、「量子力学的なタイムマシン理論」を暗示したかったことを明かしている。もちろん、彼はこの「映画では科学的な理論づけはしていない」し、絵の意味が「べつにわからなくても全く問題ない」と断っている(NOTEBOOK、36)。だから、われわれも気にとめず、映像の流れを追えばそれでいいのかもしれない。だが、筆者にはここに監督の意図しない意味を感じてしまう。そしてそれは作品世界の構造と記憶の問題に深くかかわる事柄であるように思える。端的にいえば、この一枚の絵は作品の世界と記憶の構造を表象しているのではないか、ということである。以下の論述は最終的にそのことをめぐっておこなわれる。

2. 思い出せない記憶

筒井康隆はアニメ版《時をかける少女》について、自分の作品はタイムリープをめぐるシチュエーションをかつちり作ってあるが、アニメは「突っ込もうと思えばいくらでも」突っ込めると語っている²。たしかにそうかも知れない。彼の小説の粗筋だけを記せば、こうである。主人公・芳山和子は理科実験室での偶発的出来事からタイムリープ能力を身に着けてしまう。そのことにとまどう和子は友人の深町一夫と朝倉吾朗、それに担任の福島先生に相談するが、もう一度事件のあった理科室へとタイムリープして解決をはかる。そしてそこで彼女を追って理科室へとタイムリープしてきた未来人・深町（本名、ケン・ソゴル）から事の真相を聞かされ、別れの際に彼の存在と事件全体に関する記憶を消される。ここで重要なのは、事件全体を未来人・ケン・ソゴルはすべて知っており、すべては彼の知る範囲内で起こることにある。そういう人物を設定することで、筒井は時間の錯綜を統御することに成功している。

いっぽうアニメ版では、未来人・千昭はタイムリープ装置をどこかに落としてしまい、彼が装置の残骸を理科実験室で見つけた時には、すでに何者かが能力をチャージしてしまった後だった。能力を偶然チャージしてしまった紺野真琴は、原作とちがい、未来人・千昭のまったくあずかり知らぬところで無軌道なまでにタイムリープを繰り返し、こうして原作とは相当かけ離れた「時をかける少女」が誕生する。だが、装置をなくしたと気づいた時点で自分が確実に装置をもっていた過去にタイ

ムリープするという根本的な解決策が千昭の前には横たわっていたはずである。実際、千昭は「誰かに悪用されたらと思うと、夜も眠れなかった」と告白しているくらいなのだから、確実な過去にタイムリープしても少しも不思議ではない。しかし、そうするとアニメ映画で描かれたストーリーは完全に消滅してしまう。その点、筒井原作では、深町は能力を身に着けた人物が和子であることを知っており、彼女の身に着けた能力が限られた範囲にしかタイムリープできない不完全なものであり、やがてその能力は消滅することも知っている(筒井、97)。だから深町は理科実験室の出来事以前の過去にタイムリープすることなく、慎重に事の成り行きを見守るという選択をするが、そこに不自然な点は何ひとつない³。

だが、原作は筒井がいうほど「かっちり」できているだろうか。彼の短編にもひとつ不思議なことがある。事件の起きる理科実験室には「さつきから、かすかに甘いにおい」が立ち込めていた。気を失った芳山は、回復してから、それが母に一度かがしてもらった香水と同じ匂い、ラベンダーの香りであることに思い至る。が、それにつづけて「それだけではない……。ラベンダーのにおいには、何か、もっとほかに思い出がある……。もっとだいたいな思い出が……。だが、和子には思い出せなかった」と小説は描く(筒井、18)。この思い出せない記憶とは何か。

作品では、このあと一夫の家を訪ねた際に、和子は深町家の温室にも同じラベンダーのにおいが立ち込めていることに気づき、一夫の父親に温室を見せてもらったことを思い出す。「何か思い出があるとあのときに思ったのは、ここの家のことだったかしら」と彼女はぼんやり考える(筒井、34)。しかし、そんなことが「もっとだいたいな思い出」のはずはない。事実、小説は簡単に話題を別のことに切りかえてしまう。そしてその「思い出」はこのあと一度も言及されることなく終わってしまう。つまり小説はこの疑問に対する明示的解決を与えてはくれていないのである。いったい、この「もっとだいたいな思い出」とは何なのだろうか。

短編は当初、中・高生向けの学習雑誌に連載された⁴。おそらく毎回最後に読者の関心をひき、次号に期待を抱かせる場面を用意しなければならないという制約のもとに書かれたことだろう。はたして文庫版の小見出しを見ると、この思い出せない記憶は連載第二回目の最後の言葉であつたろうと推測できる。だとすれば、これは読者を放さないためのそうした餌の一つとして理解することも可能だろう。だが、そのときには、この場面はわずか百ページあまりの小説における、構成に寄与しない粉飾部分ということになってしまう。むしろそうではなく、この思い出せない記憶を小説内の出来事と関連づけて解釈すべきではないだろうか。なにしろ、ことは物語の最重要小道具であるラベンダーにまつわる「もっとだいたいな」記憶なのだか

ら。

そうすると、解決はひとつしかない。それは小説の最後に書かれている。ケン・ソゴルによって事件と一夫に関する一切の記憶を消された和子は、それでも善良そうな中年夫婦の家——そこはかつて深町一夫の家であった——の前を通るたびに、ラベンダーの花の香りに「うっとり夢ごち」になる。「ああ、このかおり。このにおいをわたしは、ぼんやりと記憶している……」。和子はそう思う。——なんだっかしら？このかおりを私は知っている」。そうしてラベンダーの香りに包まれるとき、和子はいつも思うのだった。「いつか、だれかすばらしい人物が、私の前にあらわれるような気がする。その人は私を知っている。そしてわたしもその人を知っているのだ……」(筒井、115)。つまり、彼女の思い出せない記憶とは、深町一夫の記憶以外にないということだ。しかしそれは経験する前に経験の記憶があったということであり、消される前に記憶の消去があったということを意味する。別言すれば、小説の時間構造は破綻しているということに他ならない。筒井原作は、彼自身が言うほどにかっちりとはできていないのである。

こうした時間の破綻が作者の過誤なのか、それとも忘れられた意図なのか、それは知らない。しかし小説がここに出来させた、あるいはさせてしまった「経験する前に存在した経験の記憶、消される前になされた記憶の消去」とは何か。経験に先行し消された記憶は、個別的経験の個別的記憶ではなく、時間のパラドクスを通じてしか表象しえない愛の元型、個別的愛がそこから生まれる母型としての愛ということ以外にないだろう。すなわち、この小説が時間構造を犠牲にしてなしとげたのは、一見、淡い初恋の消去された記憶と恋に恋する乙女の期待という紋切り型のヴァリエーションを、記憶と忘却のあいまいに生起する元型的愛の揺らめきに変換することだったのである⁵。

3. 捏造された記憶と消された記憶

「愛の元型」を表象するためであろうか、小説は芳山和子と深町一夫の心の交流をほとんど描くことなく、唐突にクライマックスの「愛の告白」と「記憶を消さないで」という哀願へと突入する。この疑似恋愛ごっこともいべき実体のない「恋愛」は、二人を中学生とした設定に似つかわしいものであったろう。これに対して大林宣彦監督による映画は主人公たちの年齢を一七才の高校生にあげて、恋愛の過程をもっと丁寧にえがいている。すなわち、二人の男子生徒のあいだで揺れ動く和子の心理のひだを細密にあらわしているのだ。二人の男子生徒とは、幼なじみの堀川吾朗と未来から来た深町一夫である。

理科室で薬品の一部を吸い込み気を失うという事件の発端を別にすれば、最初の大きな出来事は、その日の帰り道で起こる。和子が事件の不思議について反芻するのに対し、吾朗が和子はオチビさんなのに重かったと混ぜ返しているとき、ふいに自転車があらわれ、和子はそれをよけようとして深町の胸に飛び込んでしまうのだ。彼女はこのときはじめてわずかなタイムリープを経験して戸惑うと同時に、深町を異性として意識して恥ずかしそうにする。総じて寡黙で内心を語らない深町の心情は測りがたいが、吾朗は幼なじみの気安さからか、二人の体の重なりなど気にも留めず、相変わらず軽口を飛ばし、饒舌である。

次の日は四月一七日、日曜日である。遅く起きた和子は、戯れに枕元のテーブルの上の二体のキューピッドの置物にキスさせる。そのとき、昨日の深町との体の重なりを想起して、それを打ち消すように遊びをやめる。かわって手にするのは、昨日、顔の汚れをふくのに使った吾朗のハンカチ、返すために洗って真っ白なハンカチである。

遅い朝の紅茶を母が入れてくれたとき、またしてもわずかにタイムリープした和子は自分の不思議な経験——この時点で彼女はこれを身に着けた能力とは理解していない——について吾朗に相談しに向かう。結局言いそびれてしまうのだが、これら一連のエピソードは彼が吾朗のほうに親近感を感じていることをあらわしている。

だが、翌日には小さな変化が起きる。その日の夜、地震のあとの、吾朗の家のそばで起きた火事騒ぎの帰り道、深町の家の前まで和子は二人でいっしょに歩いて帰るのだ。家の前で二人は親しげに話をし、和子は時間に関する自分の不思議な体験を告白しようとさえる。結局彼女はここでも思いとどまるが、別れ際に「パジャマだなんて、風邪ひきますよ」と言いながら、深町の厚地のコートの前を合わせてやる⁶。そして去り際に、振り返って小さく手をふってから嬉しそうにはねて消えるのだ。

その小さな変化を確認するエピソードが次に描かれる。一九日の朝、和子は通学途中、頭上に落ちてくる瓦から吾朗を助け、あの時と同じように吾朗の胸に身を預けるような体勢となる。この瞬間大きなタイムリープが起き、今度は一八日の朝に飛んでしまう。和子はここでも二体の赤子天使にキスをさせるのだ。しかし今回想起するのは、土曜日の帰り道の深町を助けたときの重なりに加え、先ほど（本人は夢の中の出来事かと思っている）体験したばかりの吾朗との重なり合いである。そして前者の想起が後者のそれに妨害されたことを残念に思うかのような表情を浮かべ、和子はキューピッドのいっぽうを引き離し、大きく伸びをする。

こうして和子は二度目の四月一八日を体験するが、この日の出来事を通じて和子

の感情は深町に向かって大きく振れる。雨に降られて学校からの帰り、和子は深町に呼び止められ、雨宿りのために彼の部屋にしばらく上がることにする。そこで二人は幼いころの出来事を「思い出す」。場所は和子の家である。大きな雛壇が飾っている。着物姿の女の子と半ズボン姿の男の子が絵本を見ながら「モモクリ三年」の唄を歌っている。走り回る女の子は大きな鏡を倒して割ってしまい、手をけがする。鏡の破片をとりぞこうとして、男の子も親指の先を切ってしまう。おさない二人は血の流れるたがいの傷口に唇を当て、傷を慰め合う。

セクシュアルな含意に富むこの記憶の共有を確認した二人は、急速に親密度を増し、ついに和子は深町に時間の逆戻りを打ち明ける。深町は和子を安心させようと努める。そのあと二人は深町家の温室で花に水をやりながら「モモクリ三年」の唄をいっしょに歌う。そして深町は唄の続きとして、こう歌う。「愛の実りは 海の底空のため息 星くずが ヒトデと出会って 億万年」。和子はこのとき理解しないが、「星くず」とは自分自身のこと、「ヒトデ」とは芳山和子のことであり、これは深町の愛の告白である。

そして地震があり、火事騒ぎがあり、二人は帰り道を一緒に歩く。だが今度は、途中で仲良く石灯籠に腰かけて語り合う。深町のコートの半分は和子の肩にかけられ、二人を包んでいる。深町の推理するタイムリープの話に不安を覚える和子は「もっと強く抱いて。あなたとこうしていると、安心なの」と哀願する。そして「愛の実りは」の唄をいっしょに歌いながら帰路につく。別れ際に和子は深町の親指に傷がないことに気づく。「軽かったからすぐ治ったんだ」という深町の弁解に納得して「私の傷は大切な思い出よ」とささやくように和子はいつて別れる。

こうして芳山和子と深町一夫は急速に恋愛感情を深めてゆき、クライマックスへと向かうのだが、この物語にはもうひとつの大きな筋がある。いうまでもなく和子のタイムリープの謎である。和子は当初、同級生の男子にあれこれと指示を出し、吾朗から「生意気」で「お姉さんぶっている」と評されていた。ところが小さく大きく未来へ過去へと時間を移動してしまう自分に不安をおぼえ、それが吾朗にあるいは深町に対する依存心を生み、ひいては深町に対する愛情へと発展することとなる。その不安は、夢とも現実ともつかず半信半疑でいた瓦の落下事件をもう一度体験し、吾朗の命を再度救ったときに、そしてそれと同時に深町の親指にはなかった傷を吾朗の親指に確認したときに、最高潮に達する。何重にも混乱した世界から抜け出したいと強く思う和子は、吾朗を目の前にして「深町君」とつぶやき、もう一度「深町君」と叫んで走り出し、彼の家温室へと向かう。そこでラベンダーの花の香りをかいで、あの実験室の白煙を目にした和子は、タイムリープの謎がラベン

ダーの香りと深町とに深く関係していることを確信する。別言すれば、この謎を解き自分をこの混乱した世界から救うことができるのは彼以外にいないと確信し、彼のところにタイムリープする。突然あらわれた和子に深町は驚くが、あの土曜日の実験室に戻って真相を知りたいと強く望む和子の懇願に折れて、ふたりでタイムリープする。その途上、ひな祭りの日の出来事は吾朗との体験であったことを、そして深町一夫は幼くして両親とともに亡くなったことを和子は知る。

そして土曜日の実験室に着地してからは、ほぼ原作と同様の展開を見せるが、大きく異なる点が三つある。一つは映画では深町一夫ことケン・ソゴルの住む未来が小説のように明るいものではなく、「科学の発達と人口の爆発的增加」によって植物は「ほとんど絶滅して」いる世界であること。だから薬品製造に欠かせない植物の豊富なこの時代にやってきたこと。二つ目は、ケン・ソゴルが和子との「思い出」について、和子と吾朗の記憶を借用し捏造した記憶であると告白すること。そして最後に原作とちがい、深町一夫に関する和子の記憶ばかりか、二人に関する深町=ケン・ソゴル自身の記憶も消してしまうことである。そしていうまでもなく、記憶の映画論として重要なのはあとの二つである。

ひな祭りの記憶が吾朗からの借りものであったことを告白されても、和子は「でも私の気持ちはウソではなかったわ」と言い、ケン・ソゴルも「僕が君にインプットした記憶も僕の気持ちだった」と応じる。ここに大林監督の甘さがあるといわねばならない。現在の恋愛感情と深く結びついた記憶がウソであったというのに、そこに何の幻滅も感じることなく現在の感情を大切にしようとする和子の態度に、創作としての倫理的リアリティはない。それを音楽効果と女優の初々しきで正当化したところにこの映画の弱点がある。

しかし大林はそのことにまったく気づいていなかったわけではないと思われる。それどころか、どこかでこの展開にある種の後ろめたさを感じていたのではないか。というのも、原作にはないというのに、映画ではケン・ソゴルは自分自身の記憶をも消しているからである。冷静に考えれば、未来人が過去の人間に未来のことを話したことを咎としてタイムリープ能力剥奪などの刑罰に処せられることはあり得ても、交流の記憶そのものをみずから消す必要はなにもないはずである。にもかかわらず彼の記憶まで消したのは、彼にも消去されるに値する理由があると感じていたからだと思われる。言い換えれば、記憶の消去は大林がケン・ソゴルに課した、記憶の捏造という罪に対する自己処罰なのである。なるほど、そうすることで二人の別れはいっそう悲痛なものになるだろう。大林の狙いも一つにはそこにあることも間違いではあるまい。だが人間にとって記憶がいかに大切であるか、大林は作品中

に一つのエピソードを挿入して語っている。

和子が記憶を消されて十一年後、生きていれば孫も同じくらいの年ごろの、いまは大学の薬学教室の助手を務める和子を見送って、深町老夫婦が庭で会話する。老人は「あれはもうやめた方がいい」という。「居もしない孫のものを買ったりするのは」。「それで孫や息子が帰ってくる訳じゃないんだから」。こう諭され、老婦人は同意して「そうですねえ、ではもうやめましょう」と応じ、「でも、ずーっと二人つきりなんですかねえ」と尋ね、夫は「ずーっと二人きりなんだろうねえ」と答える。そのあとのさみしさを滲ませた老女の表情が痛切である。

ここには相反する二つのことが語られている。ひとつは時間の不可逆性である。過去をやり直すことはできない。死んだ人間を取り戻すことはできない。孫のものを買ったところで、孫は生きかえらない。そしてもうひとつは、人は記憶のなかで生きる生き物であり、その時、過去は現在によみがえる。過去を取り戻せない現実と過去が再来する記憶と、人間はこの二重の世界を生きる。それゆえ人の記憶を改変し捏造し消去することの罪は重い。大林はその罪の重さを知るゆえに、記憶の消去をもってケン・ソゴルに罪を償わせたのである⁷。

4. 止まった時間をかけまわる少女

アニメ版《時をかける少女》は二〇〇六年の作である。原作が書かれてから四一年、大林作品が発表されてから二三年が経過している。二一世紀初頭の時代相を反映し、まったく異なるテイストの作品となっている。

まず、設定が大幅に変更されている。主人公は芳山和子ではなく、その姪（姉の娘）の紺野真琴。和子は三〇代後半で独身、博物館で絵画修復をおこなっている。真琴からは「魔女おばさん」と呼ばれている。ただし、高校二年生であること、妹がいること、深町と吾朗に対応するように間宮千昭と津田功介がいることなどは、大林作品を引き継いでいる。場所は西荻や上野近郊など複数の都内を合成して作った架空の下町⁸。大林作品が坂と石段の多い尾道の美しい風景であるのに対し、アニメでは東京の私鉄沿線のどこにでもありそうな狭い商店街と広々とした公園、グラウンド、高校、美術館、大きな川と土手が舞台となっている。原作の季節はわからないが、大林作品は四月半ばであった。アニメ版は夏休み前の七月一三日（木）を起点とした一週間ほどである。放課後の理科室でタイムリープ能力を身に着けるという事件が起きるのは筒井の小説や大林作品と同じだが、アニメではラベンダーの甘い香りも白い湯気もあがらない。主人公・真琴に能力をチャージするのはクルミそっくりの小さな球体装置である。彼女はそのクルミのようなものを拾おうとし

た瞬間、人影に驚き、転んだ拍子に偶然、床に落ちていたこの装置を左手二の腕の裏という見にくいところに押し当ててしまい、能力を身に着けてしまう。もちろん真琴は何も気づかないし、大きな音は立てるが気絶しない。

真琴が能力に気づくのは、踏切での自転車事故である⁹。急な下りの坂道でブレーキが効かず、そのまま閉まりはじめた踏切に突っ込んで、通過しようとする電車の前に投げ出されてしまう。死を自覚してさまざまな後悔が脳裏をよぎる瞬間、真琴は数十秒時間を逆もどりして、通行人のお婆さんとぶつかっている自分に気づく。死ななかったのだ。

「魔女お婆さん」に会って説明すると、それはタイムリープだという。私にやって見せてよ。魔女お婆さんのそそのかしが頭から離れず、真琴は河原の土手で思いつきジャンプする。昨日の自宅に着地した真琴は妹にとられたはずのプリンを食べて確信する、「私飛べんじゃん!」と。

能力を確信した真琴は、まるで悩むことがない。小説の和子はわけが分からず、深町、吾朗、それに担任の福島先生に相談する。能力の説明を聞かされても、いやだと感じ、不安になった。映画の和子は吾朗にも深町にもなかなか切り出せず、戸惑い、悩み、普通の女の子でいたいと考え、深町に懇願した。ところがアニメの主人公は正反対の方向にはしる。朝早く歩いて登校することで一三日の自転車事故を回避し、九点だった数学の抜き打ちテストでは百点満点を取り、調理実習での失敗は男子生徒の高瀬に代わってもらうことで切り抜ける。カラオケでは、時間が来るたびにタイムリープして「一〇時間くらい」歌いつづけ、声をからして帰ってくる。夕食が気に入らないときは、お目当ての献立の日にもどって食事する。野球のときにはどんな打球でもキャッチでき、どんな球でも打つことができる。河原の土手でバットを肩に担いで「どんな試合もひとり勝ちよ〜ん」と真琴は高笑いする。夕日を見つめながらショートヘアを風になびかせる真琴は心地よい高揚感に浸っている。

まったく異なるテイストとは、ひとつにはこうした主人公の能天気なはじけぶりを指しているが、中心生徒三人の性格描写とそれぞれの関係もそうである。原作小説では、吾朗はずんぐりむっくりの努力家で直情径行型だが、気が弱くそっかしい性格で頼りないところがある。荒物屋の息子である。深町はやせ形で背が高く、ぼんやりしているような夢想家型だが、落ち着いていて頭がいい(筒井、7, 20, 33)。映画のなかの吾朗は気さくだが単純、何事にもこだわりがない性格だが、気づかいに欠ける一面もある。ずんぐりむっくりはしていない。ときに制服の上着ごとシャツの袖をまくりあげるのは、醤油づくりの癖だろうか。父親がいない。いっぽう深町は背が高く寡黙で、植物が好きでくわしいところを女みたいとみられている。思

慮深く優しい人柄である。こうした吾朗と深町に相当するアニメ版の功介と千昭は、ともに背が高くハンサムな高校生である。功介はがっちりした体格で、医者の子として医大進学を目指しており、スポーツも勉強もできる。いまだきの東京の高校生には珍しく切り整えた髪形で、時々メガネをかける。落ち着いており、理知的に見える。服装はシャツの第一ボタンをはずしているが、さっぱりしている。それでいて、左耳にピアスをしている。千昭は対照的にボサボサの髪型をしていて、服装も少しだらしない。シャツのボタンは一つもとめていない。いつもズボンに両手を突っ込んでいる。数学は得意だが、漢字が読めないのは、未来人だからか。功介に比べると言葉が乱暴で、感情的なところがあり、すぐにイラつき粗暴になり、少し不良っぽく見えるときさえある。ここにささくれ立ったものを抱えることのあらわれであろう。また、原作と大林作品の深町は人々の記憶を操作してずっと昔からの隣人になりすますが、千昭は四月に転校してきたという設定である。そして原作においても映画においても和子は真面目な性格であり、性徴期の心身の不安定と特殊能力を身に着けてしまった不安とが重ねられていた。いっぽう、アニメの真琴はすこぶる快活で活動的で、その分、少々軽薄で思慮に欠けており、いささかものぐさで失敗の多い女の子ではあるが、不安定と不安からとても遠いところにいる。

和子、真琴と彼ら男子生徒との関係も、アニメ版は特有である。小説では、和子にとって吾朗と深町は一番仲の良い男子生徒らしいが、火事と相談の場面を除いて詳しい日常生活はほとんど描かれぬ。映画では先述のとおり、和子は吾朗と幼なじみで、家を訪れ、おばさんともあいさつを交わす。通学路の一部を共有しており、行き帰りをともに歩く。深町の家は和子の家に比較的近く、通学のとき、火事騒ぎの帰り道など、二人はひんぱんに肩をならべて歩く。学校での会話は少ないが、二人は次第に惹かれあう。和子の人形による戯れ、深町のつくった唄などはすでに述べたとおりである。また、筒井作品では吾朗が深町の家遊びに来ているが、映画での二人の仲は親しげではない。学校をはなれると何の交流もないようである。

ところが真琴と千昭と功介はまったくちがう。真琴は他の二人と同じクラスで席も近いというのに、校内では主に女友達の早川由梨といっしょに行動する。千昭と功介も真琴とははなれて主にふたりで過ごしている。そして放課後になるときまって三人でキャッチボールをする。キャッチボールをしながら何気ない雑談をしたり、高二らしく将来のことを漠然と話したりする毎日である。真琴は三人で遊ぶことが楽しくて仕方がない。三人でならキャッチボールでなくとも、海でも花火大会を観に行くのでもいい。千昭は野球の楽しさを知り、おそらく彼の意向が強くはたらいで放課後は三人でキャッチボールをするのだろう。功介はむしろ二人が好きなのだ

が、千昭と真琴の危なっかしいところを心配もしてつきあっているようだ。ときに注意めいたことを言い、二人をあるいは片方をたしなめるところがある。また、功介に思いを寄せる後輩から真琴との仲を疑われるが、否定する。しかし本当は彼女に対して一定の特別な感情を抱いている。

こういう人間関係のなかで、真琴はキャッチボールをしながら、三人のこの関係がずっとつづけばいいと思っている。女ひとりと男ふたりの関係は容易に三角関係になってしまうだろうが、真琴はこのジャレ合うような友人関係がつづくものと思っているし、第三者が恋愛感情をもち込んでくることも、千昭か功介が抜けることもあまり真剣に想像しようとしない。それはいつまでも沈まない夕陽のように、夕陽を照りかえしていつまでもきらめく川面のように、その川面の向こうに見える高架道路を途切れることなくつながって移動する車の列のように、毎日変わることなく繰り返されるよるこびの時間であり、変わらないことに寄りかけられる安心の時間であり、いわば時間の止まった世界である。ボールを投げ、投げられたボールを受ける。キャッチボールはそうした世界の共有を確認する最上の手段である。真琴はこうしていっぼうで時間の止まった世界を希求しながら、タイムリープをくり返し、過去を何度も修正して、自己満足の世界にひたりきる。これが筒井の小説から四一年後、大林映画から二三年後のアニメ版《時をかける少女》の最初の三分の一である。

5. 記憶の連続と上書き、反復と変容

真琴の望むこのような時間の止まった世界がゆっくりと動きはじめる。何度かタイムリープした後、七月一三日の放課後¹⁰、功介が一年生女子に告白される。三人野球をしながら功介は「断っておいた」と説明する。そのあとの帰り道、分かれ道で功介を見送ると、自転車の家においてきた真琴を千昭が送ってくれる。河原の土手を自転車の二人乗りでゆっくり走る。背景の川面が夕陽を映して美しい。世界はこのとき動きはじめる。

グラウンドではもったいないといったが、内心では断ってくれてよかったと思っていた真琴は、そのことを千昭に自転車の荷台から口にする。千昭はいくぶんの躊躇の末、勇気を出して「真琴、俺とつきあえば」と告白する。これが真意だとわかった真琴はショックのあまり、先ほどの分かれ道までタイムリープする。そして今度はおそろおそろ後ろに乗るが、またしても告白されたので、またタイムリープする。こうしてついに真琴は分かれ道において千昭の自転車に乗らずに別の道を歩いて帰ることにする。

魔女おばさんに相談すると、千昭君とつきあえばいいじゃないとアドバイス(?)をうけるが、真琴は絶対ムリ、千昭が友だち以上になっているところなんて想像できないと拒絶する。おばさんは「なかったことにしたんだ」と千昭に同情する。「せっかく思いを伝えたのに」。真琴はその言葉にハッとするが、しかしおばさんが「本人は気づいてすらいらないのか」とつぶやくと、しょんぼりする。

翌日、校内で千昭から声をかけられた真琴は眼をそらしてしまう。そのことを指摘されるとおもわず大声で否定してしまう。以後、彼女は告白されることを恐れて、そして昨日の仕打ちに対する罪悪感から、千昭のことを避けて行動する。声をかけられそうになるとあわてて席を立つし、前方からくる彼を見つけると廊下をまがってしまう。教室でも机の影に隠れ、こそこそと逃げまわり、グラウンドにも姿を見せない。明らかに自分を避けていると千昭は感じ、しかし理由がわからず荒れた態度をとる。おそらくそんな真琴の豹変について彼女の友人・早川友梨に何か知らないか相談したのだろう、二人は急接近し、デートまでする仲となる。すると今度は真琴が面白い。ショックでボールを顔面で受けてしまったり、風呂の湯船にもぐって家族に聞こえないように「あたしに好きだっていったくせに」とぶつぶつ言っているうちにおぼれそうになったりする。功介と二人だけのキャッチボールも今ひとつのらない。ただ、このシーンで功介もまた真琴に対して好意を寄せていることが明らかとなる。

また魔女おばさんに相談すると、「功介君とつきあっちゃえば。うまくいかなければ元に戻せばいいんだって」と先日とは異なるアドバイスをくれる。真琴は「人の気持ちをもてあそぶなんて、絶対しない」というが、おばさんの真意は、真琴はそういうことをいっぱいやってきたでしょ、とわからせるところにあるのだと判明する。そして修復を終えた絵を前に、何百年も昔の大戦争と飢饉のなかでかかれた、慈愛に満ちたその絵の不思議について語る。

こうした一連のやり取りと筋の運びでわかるとおり、真琴はタイムリープしても記憶は連続している。当然のことだが、タイムリープしたら記憶が切断されるのは、タイムリープしたことにさえ気づかなくなってしまう。したがって記憶の連続はあらゆる時間移動ものの鉄則である。だから能力者にとって二度目の過去は未来であり、経験と記憶は直線状に形成される。いっぽうそれ以外の人間は、それまでの経験と記憶をなかったことにされる。世界は能力者がタイムリープした時点まで巻きもどされ、能力者以外の人間はそのことに気がつかない。巻きもどされた世界は時間の進行にしたがって上書きされ、古い過去は新しい過去にとりかえられる。しかし彼らにとってその時間は初めて経験する時間なので、古い過去を消されてい

ることすら知らずに終わる。

では読者と観客の記憶はどうであろうか。それはあきらかに能力者の記憶に近い。物語が時間移動にそって展開する以上、われわれは能力者と同じ順序で出来事を経験し、古い過去が塗り替えられていることを理解する。そのいっぽうで観客とその他の人物との記憶には落差が生まれ、その差はタイムリープがくり返される回数に応じて広がっていく¹¹。そしてアニメ版の場合、細かく何度もタイムリープがくり返されるので、他の人物たちがどこまでの記憶をリセットされて何を記憶しているのか、注意深い観客でも追跡が困難になる。

さらには、記憶と関連の深い〈反復の問題〉がここには生じている。すなわち、時間移動して過去をくりかえすわけだから、同じ場面が反復され、行為のくり返しと変更がえがかれる。これは一見《博士の愛した数式》と酷似した事態である。だが、委細を検討するとずいぶんと違っている。まず《数式》において反復されるのは科白と行為であって、朝の挨拶のシーンをのぞいて場面は反復されない。また反復される原因は主として博士の短期記憶障害にあった。しかし博士はつねに真実の心で行動し言葉を発した。そして映画は巧妙に観客の記憶に働きかけて、博士と家政婦母子の絆の深まりをえがいた¹²。これに対し大林作品は時間移動能力によって同じ場面が繰り返されている。だが行為のいくつかはくり返されるものの、科白はほとんど反復されない。というのも、能力者と子が奇妙な事態に巻き込まれたと感じているため、周りとのやり取りがかみ合わずに戸惑うからである。そしてちぐはぐな会話になるのは、和子の記憶が連続しているので彼女にとっては同じことが二度起こっているが、それ以外の人物にとっては初めての出来事だからである。「あなた、何言っているの?」「芳山君、大丈夫かよ!？」周りの反応はこういうものであり、いわば記憶の過剰が混乱を引き起こすのである。だが、それにもかかわらず彼女もまた真実の心にもとづいて生きていることにはかわりはない。また、場面のくり返しは、四月一六日の放課後が二度、一八日全体が二度、そして一九日朝の瓦屋根のくずれ落ちるシーンが二度あるだけで、反復は少ない。

ところがアニメ版《時をかける少女》の真琴は、大林作品の芳山和子とちがいで、自分の能力に自覚がある。最初の出来事にこそ戸惑いをおぼえ魔女おばさんに相談したが、タイムリープできると分かってからは好き放題にその能力を使いまくる。その目的は過去の修正にあるのだから、同じシチュエーションでも真琴はちがう行動をとるし、科白もちがって当然となる。そのいっぽうで彼女は記憶の過剰を隠して行動する。だから二度目三度目の時間においてつねに真意と本気に作為と演技、虚偽と指向が混じった行動をする。ときにはどこまで真面目に受け取っていいのか

周囲も観客も測りかねるときさえある。たとえば、二度目の一三日の日直の場面で早川から進路について聞かれると、満点とった数学テストを折りたたみながら、「留学にしようかな〜」とこたえる。早川から英検3級落ちたじゃないとあきれるように指摘されると、ニコニコしながら「Time waits for no one よ」と肩をたたいて受け流す。

真琴の位置はこのように特異であるが、では彼女以外の人物たちの行動と科白はどうであろうか。それらは詳しく見ると三種類に分けられる。まず、真琴はタイムリープした場所に突然ゴロゴロ転がりながらあらわれる¹³。そのとき二重存在の矛盾を解消するために、古い過去の自分は消える。だからまわりの人間たち（主として千昭と功介）は驚きと戸惑いの科白を吐く。「お前、何やってんだよ?」「どうして俺の球が読めんだよ?」「どうして転べんだよ?」といった具合である。具体的表現はたしかに違っているが、観客はこれらを反復的ヴァリエーションと受け取るだろう。

もう一つは、修正すべき事柄と関係がないので、古い過去と同じ行動と科白をくりかえす場合である。たとえば一三日の朝、功介はギリギリに登校してきた千昭に対して同じポーズで同じ科白を吐き、千昭も同じ動作と科白で応える。こうした事柄によって観客は同じ時間が繰り返されていることを確認し、そのあとの異なる展開を強く記憶に刻む。

そして三番目として、修正すべき事柄と関係がないにもかかわらず、周りの人物が前回と異なる行動をとる場合である。たとえば、功介のことが好きな一年生の藤谷果穂と友人の三人組は、最初の一三日には血液型占いが最悪を示しているので告白を断念するが、四回目の一三日には星座占いを信じて敢行する¹⁴。また、カラオケ店で功介の注文する飲み物は三度目だけちがっている。こうしたことは、かえって反復場面であることを強調する効果を生む。と同時に、真琴が過去を思いどおりにコントロールしようとしても、うまくいかない思わぬ事態の発生する可能性を示している。事実、千昭の告白は三人組が功介に告白したことが引き金になっていた。

千昭が真琴に「オレとつき合ってみねえ」と告白する三度のシーンもまた、三回とも千昭の言動が異なっている。初回は真琴のほうから功介の一件をもち出したのであり、千昭は「彼女ができれば大事にする」という功介の性格を好意的にそしておだやかに語り、そのあと勇気を出して告白する。ところが二回目は千昭のほうから功介の同じ性格を「あいつ絶対女を取るぜ」と悪意を込めて、まるで裏切られたかのように語りだし、たしなめる真琴にむかって告白するのである。このはなはだしい千昭の描写の相違はということだろうか。作劇上なんらかの変化が必要なこ

とは当然であるが、このように千昭の性格をネガティブに描くことにプロット構築上の意味はない。何しろ告白はなかったことにされるのだから。とすれば、この場面を少々ネガティブかつコミカルに繰り返すことによって、真琴が千昭の告白をなかったことにしたことを観客が深刻に受け取らないようにという操作だということになる。この場面は後述するとおり最後の真剣なエピソードと深くかかわっているので、ここでは物語におけるこのエピソードの重要性を軽く判断するように観客の記憶を操作しているのである。はたして真琴は「だからその話は—」と、観客には理解できるが千昭には理解できるはずのない言葉を叫んでタイムリープする。そして三度目は妹の話に話題をそらそうと必死の真琴の大声に打ち勝って「そしたらオレとつき合ねえ〜」という声を画面いっぱいに響きわたらせるのだ。

だが、思わぬ事態という点では、もっと重大な出来事がある。真琴は一三日の調理実習での失敗を「なかったこと」にしようと、天ぶら係を高瀬宋次郎に代わってもらう。高瀬は真琴と同じ失敗をやらかし、さらには消火剤を周囲にまき散らしてしまう。そのためたちの悪い連中からいじめにあいはじめる。一度は千昭がとめたが、いじめの止むことはなく、激高した高瀬は不良連中を消火剤攻めにし、さらには原因をつくった真琴めがけて消火器を投げつける。真琴はここでもタイムリープを使うのだが、消火器は早川友梨に当たって怪我を負わせてしまう。

これら一連の事件は真琴が歴史に修正をほどこしたために生じたことである。だが彼女はそのことについてまるで反省がない。早川の傷を心配し責任を感じはするが、運動部の屈強な男たちに連れて行かれる高瀬に同情すら示さない。たしかにいじめは不良連中のはじめたことだ。高瀬の逆襲にも度を越したところがある。しかし真琴が実習の失敗を回避しなければ、彼女の前髪が少し焦げただけで、ことは何も起こらなかったのである。しかも最初の歴史において彼女の失敗が原因で燃えあがった炎を消しとめてくれたのは高瀬であった¹⁵。

結局、この出来事もまた繰り返かえされるタイムリープに付随して「なかったこと」にされている。だがそれが映像として観客に明示され、確認される機会は一度もない。たしかにアニメの中心主題は恋愛である。だからいじめという深刻な出来事が相対的に小さく扱われるのも、あるいは仕方ないかもしれない。しかしさらに正確にいうなら、主題の中心は恋愛を通じた真琴の成長にある。だとすれば、終幕の一連の出来事のなかに高瀬と遭遇した真琴が本心から謝る場面を挿入すべきだった。もちろんタイムリープでいじめは「なかったこと」になっているのだから、会話はトンチンカンでユーモラスなものになる。記憶の過剰が引き起こす笑いだ。だが、観客の記憶のなかでは「なかったこと」になっていない真琴の過誤は、そうしては

じめて本当に「なかったこと」になったはずである。ここにこの作品の見過ごせない欠点がある¹⁶。

6. シュレーディンガーの猫とエヴェレット解釈

先ほど、「巻きもどされた世界は時間の進行にしたがって上書きされ、古い過去は新しい過去にとりかえられる。しかし彼らにとってその時間は初めて経験する時間なので、古い過去を消されていることすら知らずに終わる」と書いたが、ここで作品の時空構造を明確にしておくことにする。冒頭に述べた量子力学と「シュレーディンガーの猫」（以下、「猫」と表記）はここにかかわってくる。

まず量子力学について、簡単に復習しておこう。一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、光や電子などのミクロの世界でニュートン力学など古典物理学では説明のつかない実験結果が数々出てきた。その結果、多くの科学者たちがあるときは独立して、あるときは相互に靈感を与えながら、当時の物理学の土台を根底からくつがえすような理論と仮説を提出し、量子力学という革新的科学分野を切り開いていった。そのなかにはアインシュタインも含まれる。かれらは共通して、われわれが普段の生活のなかで実感しているマクロ世界の物理法則はミクロ世界では通じない、ということを明らかにした。たとえば「ミクロ世界では位置と運動量を同時には確定できない」というハイゼンベルクの不確定性原理はこの文脈で生まれた。

量子力学の特徴は、ミクロの世界に確率による不確定性をもちこんだところにある。電子はとりうるすべての位置の「重なり合い」の状態で存在すると考える。この「重なり合い」の考えにアインシュタインは強い不満を表明した。彼は「神はサイコロを振らない」といって、指導的学者ボーアとのあいだに論争を起こし、数々の思考実験を編み出して彼らの量子理論の不確定性を突き崩そうとした。結局、そのすべてにおいてアインシュタインは敗れ、ボーアたちの理論が正しいことが実験で証明されるのだが、シュレーディンガーの考案した「猫」もまたそういう一連の思考実験のひとつであった。

アインシュタインのそれとちがいが、「猫」はなかなかの難問であり、今もって万人を納得させる解決のついていない問題である。箱の中に放射性物質とガイガーカウンターと毒の入ったビンと猫を入れる。放射性物質の原子ひとつが崩壊して電子一個を放出し、それを検知器が記録する確率が二分の一になる時間だけ、検知器を作動させる。そして検知器が作動すれば、毒入りのビンが壊れる仕掛けにする。ビンが割れれば毒によって猫は死ぬ。割なければ生きている。以上が実験装置のすべてである。さて、箱を閉じて実験を開始した段階で、放射性物質の原子が崩壊する

確率と崩壊しない確率は「重ね合わせ」の状態にある。箱を開けてみるまで（それが「観測する」ということだ）猫もまた「重ね合わせ」の状態、つまり生きていると同時に死んでいる状態にある。生きていると同時に死んでいる？そんな馬鹿なことがあるだろうか？！

これでわかるとおり「猫」はボーアたち量子論主流派の不完全性を立証するために考案された思考実験であった。これが解決されないのはパラドキシカルな一面を持つためだが（グリビン「下」、72-8）、それを詳述する余裕はない。ここでは主流派における量子論の本質を一）波動関数とは量子系のとりうるすべての状態を含んだ全体論的記述であること、二）波動関数は系の外部にいる観測者の観測によって崩壊し、系は確率論的不確定を脱して安定すること、三）ミクロ世界とマクロ世界は異なる法則に支配されている、この三点に要約して先を急ごう。

さて「猫」に関する解説書には必ず登場し、近年物理学者のあいだで多くの支持者を集めつつある解釈にエヴェレット解釈がある¹⁷。主流派と異なり、エヴェレットは、量子論はミクロの世界のみならずマクロ世界、いや宇宙全体に適用されると考える。そしておどろくことに波動関数は崩壊しないと考える。だがそれは世界が永久に不確定であることを意味しない。むしろ逆であって、「とりうるあらゆる状態」はすべて等しくリアルな状態であると考えなのだ。たとえば「猫」のように量子レベルで二つの可能性の「重なり合った状態」が存在すれば、エヴェレットの考えでは、宇宙はそこで二つに分裂するのである。一方の宇宙には「生きた猫」が、もう一方の宇宙には「死んだ猫」がいて、どちらも等しく実在世界である。こうして世界は無数の分枝点で途方もない数の宇宙に分裂し、それぞれの宇宙がその分枝点で各々に対して直交するのである。直交するとはこの場合、互いに影響を与えることなく別々の運命をたどるということである。観測者はもはや外部に存在するのではなく、それぞれの世界の内部にいて、それぞれの世界の運命を享受する。このように書くと単なる妄想のように聞こえるかもしれないが、これは真面目な科学論文雑誌に掲載されたれっきとした科学理論であり、主流派とまったく同じ数式に基づく世界解釈であり、実験と観測に関しても主流派とまったく同じ結果を予測するのである¹⁸。

アニメ版《時をかける少女》で細田監督が意識したのは、このエヴェレットによる多重世界解釈ではないだろうか。もちろんこれは厳密な物理理論であって、別の宇宙への移動は不可能であると考えている。監督もこの解釈に一度も言及していない。しかし「猫」に関する多くの解釈のなかで、時間軸上の同じ地点に何度もタイムリープをくり返す作品の時空間構造ともっとも相性がいいのは、エヴェレットに

より多重世界解釈である。実際、複数の解説書がこの解釈のタイムトラベル小説への転用例に触れ¹⁹、祖父殺しなどのパラドクスは起こらないことを説明している。また、そのうちのひとつは、安易に横すべりできるパラレルワールドと対比しながら、もしもエヴェレット解釈の多重世界において別宇宙への移動が可能だとしたら「われわれの世界の中で適切な分岐点まで時間とは逆方向に旅をし、そこでわれわれ自身のリアリティに直角（数ある直角の一つだ！）にやおら折り返して、再び時間方向に前進することによって」しか到達できないと書いている（グリビン「下」、129）。もしかすると細田守はこの本のこの箇所をよみ、靈感をえたのかもしれない。あたかもこの記述に合わせるかのように、千昭の告白シーンに「分かれ道」を設定している。そして三度同じ地点に立ち返り、真琴は世界内部の観測者としてそのつど異なる世界をつくりだしている。しかも最初のタイムリープにおいて、千昭は急に真琴が後ろの荷台から消えたことに気づき、不思議そうに二度彼女の名前を呼ぶ。これは、彼女が消えたあともこの世界が継続することを示唆していると解釈可能な場面である。そういう場面はもうひとつある。一三日の午後、踏切で電車の前に投げだされたとき、真琴の姿は消えたが自転車は電車にはねとばされる。これもまた複数の世界が別の運命を生きる時空構造の結果のように思われる。ほかにもまだある。先に触れたとおり、反復される歴史には真琴の意思に応じた変化と、真琴の意思と関わりのないゆえの同一出来事と、真琴の意思とは無関係なのに生ずる異なった出来事が混在している。これもまたエヴェレットの多重世界を思わせる描写である。ちなみに、彼の描く多重世界は無数の宇宙がひとつの時間軸を共有している。

だが、すでに気づいているかもしれないが、アニメにはエヴェレット解釈に矛盾する点もいくつかある。その最大のものは、タイムリープによって「過去を書き換える」という点である。九点のテストを百点満点にし、踏切事故で死ぬ運命を回避する。そして千昭の告白を「なかったこと」にする。だが多重世界構造では九点の世界と満点の世界が同時存在し、真琴の死んだ世界と生きている世界が同時存在する。千昭の告白がなされた世界と回避される世界が併存する。そして千昭のいる未来と千昭のいない未来がともにある。千昭のいるもっと別な未来もある。

この矛盾を解消する解釈はふたつしかない。ひとつは真琴と魔女おばさんの「歴史を書き換えている」という解釈は無知ゆえの誤解だというものである。もうひとつは、能力者がタイムリープを完了した時点で、もとの世界は分岐点までさかのぼって消滅するように変更が施されているという解釈である。しかし前者の場合、未来人・千昭によってその誤解が解かれるシーンがなくてはならないだろう。でなければ、「なかったこと」が誤解なのかどうか観客はいまいなままに放置されている

というおかしいことになる。では、第二の解釈はどうか。それでも無数にある世界の混乱を抑えることはできない。タイムリープによって真琴は死をまぬかれたが、彼女の死んだ世界はまだ他にたくさんあるからである。同様に、千昭の告白を受け入れて真琴と二人がデートする世界がどこかに残っているはずである。ついでに指摘しておけば、この修正だと千昭は厳密な意味で帰るべき未来を失うことになる。

結局、エヴェレット解釈も二つの修正解釈も、アニメの「なかったことにする」という行為の重さを満足させてはくれない。すなわち、このアニメのもっとも肝心な点は、タイムリープで過去を「なかったこと」にすることは可能だが、それを再度「なかったこと」にはできないということにあるからだ。たしかにもう一度タイムリープして新しい過去を上書きすることはできる。しかしまき戻して消してしまった過去を復元することはできない。それが能力者の記憶と経験が連続し直線状に形成されるということの意味である。「量子力学によるタイムマシン理論」はこの重要な点と衝突するのである²⁰。

では「猫」の絵は無意味な挿入絵に終わったということだろうか。筆者はそうは思わない。「猫」は作者の意図をこえたところで作品全体のメッセージを表象していると考え。詳しい議論は本論の最後でおこなうとして、作品後半の検討にうつることにする。そこでは登場人物と観客の記憶はどのような関係になっているだろうか。

7. ふたつの不思議

夏休みが目前に迫った七月二〇日ごろ、真琴はまたしても後輩三人組から功介との仲を疑われる。成り行きから、そして少しは人の役に立つことに能力を使おうという気持ちから、彼女は功介と藤谷果穂との仲をとりもとうと努力する。三度目のタイムリープでようやく成功し、人助けをしたいいい気分に浸って真琴はよろこぶ。だが、そのときのタイムリープでは一三日の朝八時三分に着地してしまい、あわてて自転車に乗って登校していた。その自転車を、功介が借りてしまう。仲良くなる時足にくじいた果穂を自宅の病院に連れていくためだ。そのことを携帯メールで知った真琴は課穂を乗せた功介によって事故が再現されるのではないかと不安になり、踏切に急ぐ。何事もなかったことを踏切で確認して安心する。

その直後、真琴に千昭から携帯に電話がかかってくる。ホッとした気の緩みから真琴は商店街の急な坂道をのぼりながら少し雑談するが、千昭には要件があった。真琴、おまえタイムリープしてるだろ?思いもよらぬ指摘に狼狽する真琴は数秒前に

タイムリープして（しまい？）、千昭の質問をまたしても「なかったこと」にしてしまう。この時、以前から気になっていた左手二の腕の裏側の数字が01から00に変化していることから、これが能力の残り回数であったことを確認し、つまらないことに最後の一回を使いきってしまったと嘆く。と、目の前を自転車がよぎっていく。荷台に果穂を乗せて功介が坂道をくだってゆく。真琴が死にそうになったときと同じ時刻である。必死に追いかけて自転車を止めようとするが追いつけない。前方にはブレーキが利かずあわてる功介がみえる。足の踏ん張りで止めようとして脱げた功介の靴が飛んできて、真琴の顔にあたる。下がってきた遮断機の棒に当たって功介と果穂の身体が宙を舞う。坂を転げて大怪我をする真琴は、それでも必死に時間が止まることを祈る。とまれ、とまれ、とまれ、とまれ、とまれ、とまれ——！！

真琴が目を開けると、踏切の前に立っている。時間が止まっている。振り向くと自転車を押した千昭が立っている。すべては千昭がやったのだ。やっぱり真琴か。かれはすべてを語りはじめ、真琴にむかって手のなかの使用済みのクルミ装置を差し出す。

ここまでの展開で、真琴たち登場人物と観客の記憶はどうなっているだろうか。まず真琴が一肌脱ぐシーンでは、タイムリープする真琴の記憶の過剰がかえって混乱を引き起こして、果穂の告白を妨害する様子がコミカルに描かれている。そこにおかしな点は何もない。だが、そのあとふたつ説明のつかないことが起きている。真琴は首尾よく二人の仲をとりもったあと、二の腕の数字が01になっていることに気づき、理科室に潜んで能力の謎を解明しようとする。あきらかに筒井小説を意識した場面だ。だがあのときの人影はあらわれず、結局、真琴はそれが誰だったかわからないまま踏切にむかう。だが、観客には早川友梨の科白から千昭であったことが暗示される。ということは、千昭がクルミ装置を発見したのはこの時しかない。だとすると、この時のクルミ装置は使用前なのか、それとも使用済みなのか。時系列からいえば使用前でなければならない。使用後だとすればそれは真琴でない誰かが使用したことになる。だが、ストーリーでは千昭が見つけたのは使用済みであり、使用したのは真琴しかいない。この矛盾を解消する解釈はない²¹。筒井がいう突っ込みどころの一つであろう。

もうひとつは、使用済みのクルミ装置を見ただけで真琴がタイムリープしているのではないかと千昭が疑いを持った点である。彼がクルミ装置を落としたのがいつなのか正確なところはわからないが、数日たっているとみていいだろう。だから誰がチャージしたのか千昭にはわからないはずだし、その人間がはたして能力を使っているかどうか、わからないはずである。

だが観客の多くがこの二点にすぐさま気づくことはないだろう。使用済みのクルミ装置を見せられるのは時間の止まった異様な雰囲気の中のさなかなので、そして千昭の顔つきがこれまでのやや粗暴な彼とまるでちがうので、観客の気持ちは設定の整合性よりもむしろこれから彼が（小説にくらべると遅れて）話す謎解きにむかっているからである。また千昭の指摘の件も、真琴とともにこれまでの経過をすべて記憶している観客は、彼女の受けた衝撃を共有するだろうし、彼女がタイムリープで「なかったこと」にしてしまうので、一瞬、指摘を軽く受け止めるだろう。たしかに真琴は「なんで千昭が？」とつぶやく。しかしこのとき観客が共有するのは、真琴の迫及心ではなく驚きである。加えてその直後、地響きのような効果音をとまって真琴の前をスローモーションで自転車が通過する。あとは巧みなモンタージュ技法を駆使してえがかれる、踏切事故へと至る展開に心を奪われるので、登場人物の記憶のまき戻しを整理している暇はないはずである。

ちなみに、踏切前で時間が停止していることに不思議はない。なかには千昭がタイムリープしたのはさらに二時間ほどさかのぼった過去であるとする解釈もあるが²²、真琴に携帯電話をかけた直前の時間、すなわち携帯で功介に所在をたずねた時間にタイムリープしたと考えるほうが無理がない。千昭は功介宅にタイムリープすると同時に時間を止め、功介のところから自転車を奪って踏切まできた。そして真琴が踏切にいるのを確認して、タイムリープしていることを確信するのである。

8. 多くの不思議と謎

驚愕する真琴に千昭は真実を明かす。自分はクルミ装置²³のおかげで未来からきたこと、失くしてしまっただけで探し回ったが理科室で見つけたときは使用済みだったこと、未来は自然を失って殺伐とした世界で自転車も野球もなく人もまばらであること、この時代に来た目的は一枚の絵、「この時代、場所、この季節」にしか所在の分からない一枚の絵を見るためであったこと、功介たちの命を救うために残り一回しかないタイムリープを使いきってしまったこと、だから未来に帰れなくなってしまったこと、帰らなきゃならないのに真琴と功介といることがあまりに楽しくて夏になってしまったこと²⁴、そして過去の人間にタイムリープの存在を語ってはいけないというルールを破ったので、これ以上いっしょにいられないこと。千昭はおおよそこれだけのことを真琴に語って雑踏のなかに消える。

翌日、七月一四日はこれまでとまったく違っている。千昭はいない。彼がいなくなった理由について、借金、ヤクザ、子供ができた、ナイフで刺した、バットでメッタ打ちなどどす黒い噂が校内を飛び交っている。功介はなかば真琴を慰めるよう

に、千昭は真琴が好きだったが、真琴はそういうのが苦手だから、言い出せなかったんじゃないか、と語る。だが功介の知らないところでタイムリープを重ねた真琴にとっては後悔を募らせることにしかならない。「最低だ私、人が大事なことを話しているのに、それをなかったことにするなんて」。記憶の落差は功介には当惑を、真琴には自己嫌悪をもたらす。泣きながら階段をかけのぼって校舎の屋上にいく。タイムリープの助走と同じだが、もはや飛ぶ力はない。

魔女おばさんのところを訪れると、二人は、真琴は昨日までの真琴ではないことを確認する。すなわち、昨日までは功介も千昭も恋愛の対象ではなく友だちでしかなかったが、いまは千昭が好きだということ、千昭の告白を「なかったことにした」ことを後悔していることを確認する。そして自分の過去²⁵を話したあと、ある言葉によって真琴を励ます。

この三つのシークエンスにはいくつかの不思議と謎がある。まず、千昭のタイムリープによって真琴は功介の踏切事故の記憶を失っているはずだが、そうはなっていない。また携帯電話での会話でタイムリープを指摘されたことも、最後の一回を使ってしまったことも忘れてはいるはずである。いっぽうタイムリープしたのは千昭だから、彼の記憶は連続している。しかし真琴が何回タイムリープしたか知らないのだから、彼女が能力を使い切ってしまったことはわからないはずである。ところが謎解きの場面で二人は、もうどちらにも能力が残っていないことを知っているかのようにふるまう。本来なら、真琴は自分の能力をここで使おうとしてもいいはずだし、千昭も絶望を押し殺しながら深刻な話をしなくとも、真琴のタイムリープ能力に期待をかけていいはずである。もちろん、本当にそんなことをしたらドラマは台無しになる。しかし作劇上の要請がどうあれ、作品が設定した記憶のルールに反していることに変わりはない。

いくつかの謎にも触れておこう。クルミ装置でタイムリープできるのだから、千昭は相当遠い未来から来たことを暗示している。千年でもきかないかもしれない。だが、そこにいたるまで人類はどのような歴史をへて、どのような社会を形成しているのか、千昭はそこで何をしているのか、彼の説明からはほとんど何も見えてこない。彼自身、系統だてて説明する気はなく、われわれは切れ切れの情報をつなぎ合わせて漠然とした未来像を思い浮かべるしかない。姿を消す千昭はその後どうなるのかも、よくわからない²⁶。未来に帰れないのは間違いないが、よくある時間警察とやりに連行されるのか、遠くでひっそりこっそり暮らすのか、謎のままである。また、彼がこの時代に來た目的は一枚の絵を見るためだったという。魔女おばさんが修復中のあの絵である。どんなに危険でもその絵を見たかったと千昭は語るが、

それが彼にとってどういう意味があるのか、彼の社会とどうかかわるのか、真琴も問いかねはするが、千昭は答えない。筒井の小説と大林の映画において、深町が饒舌に未来社会と来た目的を語ったのと対照的である²⁷。

こうした不明確さに不満を抱く観客もいるかもしれない。しかし筆者は肯定的にとらえる。千昭が多くを語らない未来は観客にむかって開かれているからだ。小説や映画の説明は未来像の明確な輪郭をえがくが、世界はそれで閉じてしまう。観客はその合理性に納得して、それで終わりである。アニメでは謎が残るだけに、かえって千昭の語る世界は、いや彼の語らない世界は観客の記憶のなかで、尾を引く。

過去の作品との対比でいえば、真琴は記憶を消されない。過去の人間にタイムリープのことを語ってはいけない。ゆえに語った場合は記憶を消去する。筒井の小説はそうになっている。大林の映画では和子と深町の両者の記憶が消去された。しかしアニメでは真琴の記憶は消されない。そのことの意味は何か。しかし今は指摘するにとどめて、後でもう一度立ち返ろう。

では第二シーケンスはどうか。ここに記憶の点で問題はない。だが倫理上の問題はある。真琴は「人が大事な話」と言っているが、これは明らかに千昭の告白を指す。だが真に重大なのは、千昭と交わした最初の携帯電話の会話を「なかったこと」にしたことのはずである。そのために真琴は目の前を通過する功介の自転車を止めることができなかった。それゆえ千昭は最後の一回を功介たちのために使ってしまい、未来へ帰れなくなったのであるから。だが、真琴は告白を「なかったこと」にしたことをはるかに重大な過ちと考えている²⁸。念のためにつけ加えておくが、もしもこの場面で自分がおこなった最後のタイムリープのことを忘れていたら、今度は前後の場面と記憶のつじつまが合わなくなってしまう。

そして魔女おばさんである。この人はじつに不思議な女性である。彼女はこの場面を含めて五回登場するが、最初の三回は同じ日の同一時刻、一三日の午後六時ごろのことである。だが彼女はタイムリープによって反復された時間を共有し、真琴と観客の記憶を共有しているかのようにふるまう。とても同じ日の同じ時刻に巻き戻された時間を生きているようには思えない。ではこの場面はどうか。真琴と千昭が二重にタイムリープしたこの歴史において、真琴は一三日の夕刻には彼女のもとを訪れていない。翌日のこの場面が初めての訪問なのである。これまでの経緯の記憶はすべてなくなっているはずである。しかし彼女は、かつて「真琴は千昭君と」「真琴は功介君と」と話したことを踏まえたうえで「ほんとは真琴は功介君とも千昭君とも」と語りはじめる。そして自分は待つ人生を送ったけれど、「真琴、あなたは私のようなタイプじゃないでしょ。待ち合わせに遅れてきた人がいたら、走って

迎えに行くのがあなたでしょ」と、真琴のこれまでの軽率な行動をすべて包容し、未来への行動をうながして力強く励ます。しかし「走って迎えに行く」とは、千昭との関係でどのようなことなのか。その答えはやがて分かる。

9. 待つことと走ってゆくこと

その日の夜、おばさんの例の言葉を反芻していたら、真琴は偶然タイムリープの残り回数が01になっていることに気づく。千昭が時間をまき戻したせいだと気づくと、ならば自分がタイムリープすれば千昭は未来に帰ることができる。そう気づいた真琴は最後のタイムリープをおこなう。これまで何度か描かれた「時の回廊」のなかで、真琴ははじめて前を向く。そこで真琴が見たものは千昭が転校してきてからの三人の思い出だった。キラキラ輝くかけがえのない時間が走馬灯のようにかけめぐってゆく²⁹。

真琴が着地したのは一三日の理科室であった。倒れた姿勢の真琴の脇にあのクルミ装置がころがる。真琴はそれを拾いあげる。つまりこれは同じ一三日でも最新の過去ではなく、物語のなかでもっとも遠い過去の一三日、最初の一三日である。これは、このアニメにとってもっとも重要であるはずのルール、「タイムリープで過去を「なかったこと」にすることは可能だが、それを再度「なかったこと」にはできないということ、もう一度タイムリープして新しい過去を上書きすることはできるが、まき戻して消してしまった過去を復元することはできない」というルールを破っている。しかも他の場面における構成上の不具合とちがい、ここでは直前の過去を観客は眼にしたばかりだ。理科室で身をひそめて、人影のあらわれるのを待ったあの一三日午後二時四分である。本来のタイムリープはここでなければならぬはずであり、そのことに気づかない観客はほとんどいないにちがいない。

ここにこの作品の評価の分岐点がある。これをとんでもないご都合主義の解決とみるならば、鼻白んでとても以下の展開にはつき合えないだろう³⁰。いっぽう、理由³¹はさておきこれを許容する観客は、もう一度くり返されるであろう千昭との別れのシーンに感情移入できるだろう。

この両者の割合がどれほどであるか、筆者にはわからない。しかしこのアニメには観客の意識下にはたらきかけて、彼らを後者に導く仕掛けがほどこされている。そのひとつは魔女おばさんの例の励まし言葉である。「待ち合わせに遅れてきた」千昭を「走って迎えに行く」。それにはチマチマとさっき過ぎ去ったばかりの過去にジャンプするのではなく、できるだけ遠くの過去に飛ぶことがふさわしい。そう思う観客は少なくないはずだ。しかしそれだけではない。仕掛けはもうひとつある。

また、魔女おばさんの例の言葉もここで役目のすべてを終えてはいない。今はその言葉のもうひとつのはたらきに向けて先を急ぐことにして、もうひとつの仕掛けについては本論の最後で触れるとしよう。

真琴はルールを破って飛んではきたが、記憶は連続している。記憶の過剰とまき戻しはここでもはたらく。早川友梨と日直の仕事をしながらか話が千昭のことに及ぶと、真琴はきっぱりいう。「私、千昭のこと好きだ、ゴメン」。この「ゴメン」の意味は二重である。早川は自分の心を見通されたと思ったが、真琴にとっては千昭と早川の交際を「なかったこと」にした、そのことに対する「ゴメン」である。早川は真琴を送り出したあとの誰もいない空間にむけて「真琴、Time waits for no one」とはげます。初回は真琴が黒板の落書きを何気なく読みあげた言葉、次には真琴の留学話のオチとして使われた言葉、カラオケの場面で何度も登場し千昭の歌っていた言葉が、ここでは大切なことばとして響く。

グラウンドに向かう真琴は公園で功介と会う。ここでも真琴は記憶の過剰からおかしなことを口走る。例の三人組をみとめて、野球に誘いなよと功介を促す。そして「私の自転車使ったら五千円！」と彼に理解できない言葉で釘をさす。立ち去り際に真琴は「待っててくれてありがとう」といい、功介は「前見て走れ」と返す。この会話も二重の意味に響く。ひとつはもちろん、いっしょにグラウンドに行くために待っていてくれた功介に用事をいいつけ、一人で千昭のところに向かうお詫びの言葉である。そしてもうひとつは、この物語を通じて（魔女おばさんのように）ずっと「待って」いてくれたお礼の言葉である。功介の言葉もまた、一義的には振り返りながら走る真琴に対する注意であるが、これまでの「なかったこと」にされた歴史を知る観客は、過去にとらわれないで前に進めという、愛のこもった励ましの言葉として聞く。

グラウンドまで真琴は走る。それは意外と遠く、真琴の息づかいが激しくなる。走るうちにつかれて画面からいっとき消えるが、追いつき、画面を追い越してしまう。これからの真琴は（タイムリープの力を借りずに）自力で未来を切り開くことの卓抜な表現である。

グラウンドにつくと、真琴は手のなかのクルミ装置を見せる。うろたえる千昭に、すべて千昭が話してくれて、すべて知っていることを告げる。未来から来たが、もう飛べないことを明かす。千昭の手のなかでクルミをつぶし、千昭があと一回だけタイムリープできることを確認して、ホッとする。「話しちゃったの、俺？」「うん」「信じたの、おまえ？」「うん」「そんなこと言いに来たのかよ？」「うん」。真琴は強く別れを意識している。そして今度こそ「大切なこと」を真剣に聞く決意でいる。

千昭は「何で話しちゃうんだよ、俺のバカ」と嘆く。彼もまた別れのときを意識している。

時間は過ぎる。踏切に通じる道を今回も同じ人たちが歩いている。商店街には時刻を告げる機械仕掛けの音楽隊人形が踊り、遮断機が下がり、電車が通過する。何も事故は起こらない。あれほど恐怖をかきたてた同じ事物が、今回はなんと安堵とも悲しさを与えることか。

場面は夕暮れの河原の土手に切り替わる。河原ではあの時と同じく子供たちが遊んでいる。川のむこうに高架道路が見え、ゆっくり車が走る。川は夕映えを反射している。「なかったこと」にした告白のシーンと同じである。しかし今度は、二人は少しはなれて土手にすわっている。別れのときが近いことを意識している。真琴が絵の話をしはじめる。あの絵、未来へ帰っても、もうなくなったり燃えたりしない。千昭の時代にも残っているように何とかしてみる。

これを別れの時間を引き延ばす、他愛のないおしゃべりとみる観客もいるだろう。しかしそうでない観客はここにひとつの問題を認めるはずである。すなわち、未来が過去に影響して過去が未来を変えろというタイムパラドクスの問題である。これもまた筒井のいう、この作品の突っ込みどころのひとつだろうか。筆者はそうは思わない。その理由は次節で述べるとして、いまは先を急ごう。

いよいよ別れの時が迫り、真琴は千昭の告白を待っているが、千昭はちがうことをいう。最後の言葉として千昭が言ったのは、注意力が足りないんだから、考えて行動しろよな、という忠告であった。がっかりして悲しくなって、心配してくれてありがとう、分かったから早くいって、と真琴は千昭を画面から追い出してしまう。とぼとぼと帰りかけるが、振り返る。そこに千昭はいない。あの告白のときの自分たちに似た自転車の男女の後ろ姿が遠ざかるだけである。なぜうまくいかなかったのか。やり直しのきかない時間をおかみしめて、泣きじゃくりながら帰りかける。そこに千昭がふたたびあらわれる。後ろから肩を抱かれ、胸元へと引き寄せられて、耳元に千昭の声が響く。「未来で待ってる」。真琴はうれしくて「うん、すぐ行く、走って行く」と応える。

今度こそ千昭を見送った真琴は、翌日、やはり巧介と野球をしている。例の三人組もいっしょだ。別れの挨拶なしにいなくなってしまったことを功介はなじる。これに対し真琴は千昭をあいまいに弁護すると、「私もさ、じつはこれからやること決まったんだ」という。何だと尋ねると「ヒ・ミ・ツ。また今度ね」と答える。モクモクと沸き立つ巨大な入道雲を見つめながら、真琴は何事か考え、それからバットを構える功介に向かって球を投げるところでこの物語は終わる。

この一連の最終シークエンスの最大の謎は、いうまでもなく千昭と真琴の会話である。その意味をめぐってネット上ではいろいろな解釈がなされているが、謎は解かれたとはいいいがたい。たとえば、千昭は未来でタイムリープ能力を使って大人になった真琴に会いに来るのだという説がある。だが、それが「すぐ行く、走っていく」ことになるのか。そのときの「やること決まった」という中身は何なのだろうか。

またこういう解釈もある。すなわち、千昭と真琴は二度と会うことはないが、真琴は千昭を思いながら生きた証を残す。千昭は未来に帰るとすぐにそれに気づく。そのとき千昭の心の耳にはさっき別れたばかりの「すぐ行く、走っていく」という言葉が響いている。真琴の言葉は光よりも早く未来に届くわけで、まさしく「時」をかける少女である。だが、その「生きた証」とは何なのか。また、真琴の決意した「これからやること」が何なのかに答えていない。

もっと作品のなかに手掛かりを求めれば、例の絵ということになる。千昭は結局あの絵を見ずに未来に帰ったのだから、絵を焼失から守り、千昭の未来に送りどけることが、ここで真琴のいう「これからやること」である。そしてこれを先ほどの解釈につなぐのはどうだろうか。実際、そう考える観客もいる³²。

最後の二つはタイムパラドクスを含んだ解釈だが、それでもいいなら、さらに複雑にするのはどうだろうか。千昭は一度真琴の前から姿を消したとき、未来に帰って絵を見たのである。だからまた戻ってきて、真琴に「未来で待っている」とそのよこびを伝えた。いっぽう真琴は千昭の言葉を聞くまで何も決意していなかった。絵に関する先ほどの言葉も、別れをひきのばす、他愛のない慰めの言葉にすぎなかった。しかし、まさしく「すぐ行く、走っていく」と言った瞬間に、彼女のなかで絵を守る決意は生まれた。結果、絵は未来に残るのである。

はたしてわれわれはこの謎をどう考えるべきなのだろうか。もう一度この作品の問題点を整理して、この会話の意味に迫ってみたいと思う。

10. 魔女おばさんの術

江藤のいうとおり、「時をかける少女」の主体は深町=ケン・ソゴルにあり、芳山和子は彼が未来から来て帰るあいだの事件に巻き込まれる人間である（江藤 157）。細田版《時をかける少女》も基本線では同じ構造をなしており、未来からきた千昭がふたたび戻るまでの物語である。しかし筒井の小説や大林の作品とちがい、千昭は未来について多くを語らないし、現代にやってきた目的にも謎が多い。また真琴は和子とちがい、能力に不安をおぼえることはない。それどころか、よろこんで使

用する。そして彼女の記憶は消されない。

まず、千昭の残した謎についてもう一度整理しておこう。まずあげられるのは千秋が現代にきた目的の絵である。魔女おばさんが修復した絵の謎だ。作者もわからない。美術的価値がどれだけあるのかも現在のところわからない。何百年も前の歴史的大戦争と飢饉の時代に描かれたことだけがわかっている。「白梅二椿菊図」と題されたそれは、全体に淡い茶色を基調色としており、菊とも百合とも曼珠沙華ともみえる花卉と白い梅のような花がゆっくり渦を巻く中心に、菩薩のように柔和な表情の女性の顔と青を主体とした玉が四つ描かれている。上の二つは乳房とも、四つの玉を女性が抱えているようにも感じられる。細田は「ある種の救いを感じさせるような」テイストを求めたと語っている（NOTEBOOK、34）。「世界が終ろうとしていたときにどうしてこんな絵がかけたのかしら」とおばさんはつぶやく。

この絵の運命もまた謎である。千昭の時代にはすでに焼失してしまっており、いまの時代以前では所在が分からない。あると確実に分かっているのは、この時代、この場所、この季節だけという、千年をこえる歴史のなかに一瞬咲いた幻の花のような絵である。

千昭はこの謎に満ちた絵を見るためだけにこの時代にやってきた。なぜ見たかったのか、絵にはどういう意味があるのか、千昭が語らないことが、かえって観客の想像力をかきたてる。

千昭の住む未来は川が流れておらず空は狭く、野球もなければ自転車もなく、なにより人がまばらな世界である。いや、自由に時間を往来できるほどの科学力をもっている世界では、人間はほとんど対面なしに過ごすのかもしれない。生産も通信も売買も学習も医療も統治もすべて孤独のなかで行われるのかもしれない。それとも異常な科学の発達が未曾有の大戦争と飢饉を引き起こし、終末的世界から逃れた千昭はこの絵に慰安を求めて来たのか。千昭は未来で何をしているのだろう。平凡な高校生なのか。何かの職に就いているのか。親はいるのか。心配はしないのか。

だが千昭は未来について確実にわれわれ観客よりも知っており、あの絵についてもおそらく多くのことを知っている。作者が誰かも知っており、その美術的価値も知っているに違いない。だが、千昭はそうしたことを語ってくれない。

今度は真琴について、彼女の記憶が消されない理由について考えてみよう。筒井の小説では、ケン・ソゴルは冷徹にもルールにしたがって和子の記憶を消す。過去の人間に未来のことを話しても記憶を消せばタイムパラドクスは起きないからだ（筒井、106-7）。その結果、愛は始まるまえに完結する。大林映画では、深町は和子と自分の両者の記憶を消す。和子の記憶が消される理由は小説と同じだが、自分

の記憶を消すのはおそらく自己処罰なのだろう。その結果、記憶を捏造してまでつくりあげた愛は打ち切られる。こうしてみると、真琴の記憶が消されない理由は明らかである。千昭は、ひいては細田監督とこの作品は、タイムパラドクスをみとめているのである。そして愛は打ち消されても打ち切られてもならず、継続されねばならないからである。

だとすると、千昭と真琴の会話の解釈はタイムパラドクスを含んでいなければならないだろう。ということは、上記に示したいくつかの解釈のうち、最初のもののほど妥当性は低く、最後のもののほど可能性が高いと考えていい。だが、それはあくまで蓋然性にとどまってしまう。なぜなら千秋の未来と絵にあまりにも謎が多く、そのゆえにタイムパラドクスの実現が困難に思えてしまうからである。千昭の未来はあまりに遠く、絵の消失はいつのことかもその原因もわからない。だというのに、真琴は平凡な高校生でしかない。だからやはり真琴が決めた「これからやること」が何なのかわからない。

結局、作者は明快な解釈によって決着がつかないように仕組んだとしか考えられない。閉じられた箱のように、ふたりの心の内は二人にしかわからない。そう仕組んだのである。なかには、作者はいい加減で思わせぶりのデタラメな会話を構成しただけだと憤る観客もいるようだが（Site J を参照）、彼の会話はデタラメではない。はっきりとした形式がある。彼らの会話は魔女お婆さんのあの励ましの言葉に呼応するのである。すなわち、あの会話でふたりは待ち合わせの約束をしたのである。千昭は未来で「待っている」。もしかすると「待ち合わせに遅れて」来るかもしれない。だから真琴はそうならないように「走って」迎えに「いく」のである。この形式だけがあって内容の不明確な言葉のなかに、これまでに提示された未来とあの絵に関するもろもろの断片をはめ込んで謎を解きたいという誘惑に、観客は勝てない。だが、あたかもピースの足りないジグソーパズルを解くかのように、ことばの内実を埋めることはできない。そして上記のようなさまざまな解釈を思い浮べては否定して、いくつもの堂々巡りをくりかえす。いわば観客は魔女お婆さんの術にはまったのである。

この、複数の解釈がひとつの結論へと収束しない状態、それぞれの蓋然性をともなってひとつに確定しない状態は「シュレーディンガーの猫」を思わせる。観測者がふたを開けてみるまで「生きている猫」と「死んでいる猫」が「重ね合わせの状態」で存在するあのパラドクスである。閉じられた箱のように、ふたりの心の内は二人にしかわからない。その意味であの何気なく挿入された絵は、このクライマックスの会話の不確定性を表象する一枚である。

念のためにつけ加えると、筆者はこのことを、すなわち物語のなかでもっとも重要な会話の意味を確定できないことを、作品構成上の過誤だとは思わない。というのも、このアニメそのものが最終的に両立しがたいものの併存をみとめるパラドキシカルな作品だからである。最後にそのことを示して論を閉じるとしよう。

11. 記憶の雲

さきほど、真琴の記憶が消されない理由はタイムパラドクスの肯定と愛の継続にあるとのべた。だが、消されない理由はもうひとつある。それは徹底して真琴の記憶を観客の記憶に一致させるためである。そのためにアニメは彼女の記憶に関していくつかの不思議なことをおこなってきた。千昭のタイムリープによって時間をまきもどされた真琴は、最後の一回を使い切ってしまったことを知らないはずだが、知っているかのようにふるまう。それどころか、自宅の二階で二の腕の数字が 01 に戻っていることに驚きさえする。これは観客が使い切った事実を知っているからである。千昭もまた彼女がタイムリープ能力を使い切ったことを知らないはずだが、知っているかのようにふるまう。これも真琴の記憶と観客の記憶とが一致するのをさまたげない工夫なのである。さらには上記の絵と未来についての謎について、千昭が知っていることを真琴は知らない。この点でも彼女の記憶と観客のそれは一致している。

これが、すなわち真琴と観客の記憶の一致が、ルール破りの真琴の最後のタイムリープを観客に許容するよう誘導する仕掛けである。どうしてそれが仕掛けなのか。なぜなら、幾多のタイムリープがくりかえされるたびに、過去は「なかったこと」にされるわけだが、そうして新しい過去が生起するたびに、真琴と観客の記憶のなかで、古い過去は「ありえたかもしれない過去」に転化してきたからである。我々の記憶のなかで、まぬかれた真琴の踏切事故死は「ありえたかもしれない過去」になったはずである。真琴によって三度打ち消された千昭の告白は、観客の記憶のなかで「ありえたかもしれない過去」に転化してはいないだろうか。そして千昭のタイムリープで回避された功介と果穂の事故死もまた、「ありえたかもしれない過去」に変化したはずである。「なかったこと」にされた事実が「ありえたかもしれない過去」の記憶に転化する経験を何度も重ねてきた観客は、次のタイムリープでも、上書きされる過去によって古い過去の事実を記憶の一コマに変換する心理が形成されており、その心の準備が強い観客ほど、最後のルール破りのタイムリープを許容して、今まで真琴がタイムリープを通じて経験してきた過去の事実をすべて「ありえたかもしれない過去」として受容するのである。こうした誘導が可能であるために

は、真琴の連続する記憶と観客の同じく途切れない記憶が一致している必要があるのである。

「なかったこと」にされたのは過去ばかりではない。真琴の踏切事故死には、それにつづく未来があったはずである。九点のテストと散々な模試の成績のつづきもあったはずである。千昭と早川がつき合う過去には、そのつづきがあったはずだし、その未来ではもしかすると真琴は巧介とつき合っていたかもしれない。そして千昭の告白を「なかったこと」にしなければ、ふたりは何度も河原の土手を自転車の二人乗りで帰ったかもしれない。つまりタイムリープは過去ばかりか、「ありえる未来」をも「なかったこと」にし、「ありえたかもしれない未来」に転化するのである。千昭を追い立てた後、とぼとぼと帰りかけて真琴は振り返る。そのとき自転車の男女の後ろ姿をみる。真琴はそのふたりにあの告白のあとにつづく自分たちの「ありえたかもしれない未来」を見て、それが取り戻せないことを痛切に感じて泣くのである³³。だからであろう、千昭の最後の言葉が「未来で待ってる」であり、真琴が「走っていく」とこたえたのは。

考えてみれば、記憶には過去と未来が併存している。しかも「あった（ありえる）」位相と「ありえたかも知れない」位相に無数の過去と未来が浮遊している。それらはつねに流動的な状態にあり、反転していてもおかしくなかったという感情を伴って現在へとせり出してくる。想像やら期待やら後悔やらが幾重にも重なるとき、実際それらは反転して意識の地平に浮上する。そのとき、新しい経験が過去を新たに意味づけ、事実と空想の関係を組み立てなおす。重大に思えた事実も小さな事柄に思えてきて、ほとんど意味をもたなくなる。事実かどうかさえあいまいになり、ほとんど「ありえたかもしれない」記憶の相へと流れ去ってゆく。そのいっぽうで、忘れていた過去を思い出し、先取りされた未来と照合され、そこから新たな未来が生起して、その展望を切り開く。記憶とはそのようなパラドクスに満ちており、つねに新しい意味を生成するなにかのである³⁴。そしてアニメはそのような記憶のはたらきを笑いとユーモアに満ちたSF的趣向によって再現して見せたのである。

だが、記憶も物語も、それでは終わらない。作者はさらに真琴が雲を眺めるシーンをつけ加えている。作者はここでもう一度、記憶のいっそう深いパラドクスを出来させている。すなわち、真琴の記憶において「なかったこと」にされた過去と未来は「ありえたかもしれない」時間へと変換され、しかも最終的に彼女の記憶は消されないで、そのすべてを真琴はおぼえている。このとき、真琴の死んだ世界、子連れのおばさんにぶつかって死をまぬかれた世界、功介に五千元だからね！と釘を刺した世界、功介と果穂が死んだ世界、千昭が姿を消した世界と約束を交わした

世界が、彼女の記憶のなかで重なりながら波打っているはずだ。それらは真琴と千昭のタイムリープによって一本の線状に配列されたが、そして一度は確定した時間とありえたかもしれない時間とに色分けされたが、空を目指して膨張する積乱雲を眺めるとき、本来両立しないはずのどの事実も「たしかにあった事実」として真琴と観客のこころのなかで記憶の雲を形成しているはずだ。このことに気づくとき、あの「シュレーディンガーの猫」の絵が一瞬、浮かんで消えるのは筆者ひとりだけであろうか。

註

本論は「記憶の映画論1--《博士の愛した数式》」(*PHASES* 1、pp.88-98)につづけて書かれた論文であり、当初 *PHASES* 2に掲載を目指して書かれたが、あまりに長すぎると筆者自身が判断し、『人文学報』に載せることにした次第である。

本論文を書くにあたって使用したテキストは次のとおり。

- ・『時をかける少女』筒井康隆（二〇一〇年改版二五版 角川文庫）
- ・『時をかける少女』大林宣彦監督 原田知世主演（日本公開一九八三年 DVD二〇〇〇年 角川書店）
- ・『時をかける少女』細田守監督（日本公開二〇〇六年 DVD二〇〇六年 角川書店）

1. 詳しくは新装版『時をかける少女』の巻末に書かれた解説「「時をかける少女」の文彩」(江藤茂博)の pp.236-37 を参照。アニメ版までの映像作品が列挙してある。その後、二〇一〇年に谷口正晃監督「時をかける少女」が制作公開されている。これはアニメ版の主人公・紺野真琴の声優を務めた仲里依紗が主演した作品で、大林作品、アニメ版へのオマージュに満ちている。

2. BS アニメ夜話 Vol.09「時をかける少女」p.72 を参照。

3. 未来人・ケン・ソゴルは、最終的には彼に関わったすべての現代人から彼の存在と彼に関する出来事の記憶を拭い去るつもりでいる。この根源的解決方法もまた、彼が理科実験室の出来事以前の時間に戻る必要がない大きな理由のひとつである。また、リープ能力を身に着けた真琴は、その由来を調べようとしてリープ能力を使うことをしない。

4. 小説「時をかける少女」は学習研究社から出版された学年別学習雑誌『中学三年コース』一九六五年十一月号から『高校一年コース』六六年五月号にか

けて連載された。

5. 江藤茂博は小説「時をかける少女」から(一)愛の物語の展開をその最初期段階で「根こそぎにされたときに生まれる愛の初源の余情」と(二)「和子のロマンチックな物語の予感」とを抽出し、前者が後者に収束する物語だと読み解く。江藤 31-34 を参照。江藤のいう「愛の初源」が何を指すか不分明であるが、筆者の考えはむしろ逆である。すなわち、「物語の予感」は時間のパラドクスによって「愛の初源」に先行することが示されているのである。

6. この行為は、三人の生徒を理科実験室から帰らせた後、立花先生が福島先生のネクタイを直しながら「そういえばお誕生日でしたわね、明日」という行為と対をなしており、親密度をあらわす仕草である。

7. 江藤茂博は大林作品を脱構築にかけているが、筆者は二つの点で疑問を感じる。まず江藤の分析を概観すると、映画を支配するのは「恋愛の形而上学」である。深町と吾朗は和子の恋愛の対象となる「対立二項」である。そして深町はひな祭りの「思い出」をテコにして恋愛において「優位項」に立つ。だが本来、その「思い出」は吾朗とのもものだから、深町が消え、和子と吾朗の記憶が元に戻されたならば、今度は吾朗と和子の恋愛がはじまらなければならないはずである。にもかかわらず、和子は吾朗を恋愛の対象として選択しない。「恋愛の形而上学」は一度劣位におかれた恋愛をその後も抑圧しつづけ、物語から一貫性を奪い、自己矛盾に陥っている。以上が、江藤の論旨である。江藤 238-58 を参照。

しかし筆者には何のためにこのような脱構築を試みたのか、その目的がわからない。分析の過程で江藤は、一夫と和子は「制度の内側」にいるが、「大学に進学しなかった吾朗は、イメージとして、そこから排除されている」とする。つまり吾朗は一夫に比べて和子とは釣り合わない社会的周縁者であり、彼との恋愛を抑圧することでそういう周縁者を差別しているといいたいのだろうか。それならば、そう明示すべきである。だが、吾朗は由緒ある醤油醸造業者である。一夫に比して社会的劣後者にあたるとは言えない。

また、仮に江藤の列举する分析要素がすべて正しいとしても、深町との恋は「吾朗によって再び繰り返される恋愛劇の先取りでしかなかったはず」だとは思えない。深町と和子、吾朗と和子では決定的な一点がちがうからだ。すなわち、深町に対して和子が愛を深める過程ではタイムリープの謎という不安要因が彼女を動揺させていたが、記憶を失ったあとの吾朗との関係においては、そういうものはないからである。したがって、のちの和子が吾朗と恋愛しなくとも不思議はないのである。もちろん、恋愛をしても同じく不思議はないが、吾朗によって同じ恋愛劇が再び繰り返

返されることはなかったはずだ。人がちがえば、プロセスも結果も異なる。それが人生である。

8. NOTEBOOK、pp.74-80 に、舞台設定のもととなった踏切、商店街、グラウンドその他の、ロケハンが撮った写真が掲載されている。

9. タイムリープ能力発動のきっかけは、原作ではトラックにはねられそうになる死の恐怖、大林作品では不意にあらわれた自転車をよけようとしたことであった。アニメ版はどちらにも少しだけ似ている。

10. これを一四日のこととする解釈もあるが、自転車の件を考えると一三日が正しいと思う。

11. 大林映画のハイライトの一つは、二度目の土曜日の放課後、理科室の掃除に向かう直前の吾朗と和子の会話である。ここにおいて吾朗の記憶と和子・観客の記憶は最大限に差が開き、吾朗に対する切なさが最高度に高まる。

12. 詳しくは拙論「記憶の映画論1--《博士の愛した数式》」*PHASES* 1、88-98を参照。

13. いつも後方回転していると思い込んでいる観客が多いと思われるが、そうではない。また、過去に戻るときは後方に、未来にタイムリープするときには前方に回転するというのちがっている。カラオケ店、野球の捕球、消火器のシーンでは、過去にリープしているが、前方回転している。

14. これを一四日の出来事と考える人々もいるが、同じ日の帰り道で真琴が自転車ではなく歩きであることに千昭が初めて気づくシーンがあることから見て、一三日と解釈するほうが正しいと思われる。Site A と Site H を参照。前者が正しいと考える。

15. Site J と Site K にこの点に関する嫌悪感を述べた意見が掲載されている。

16. 本文の流れにうまく乗せて書けなかったが、映画にはイメージの反復の問題がある。大林作品では煙と湯気の映像が頻出する。これはもちろん、和子が理科室で薬品のにおいをかいで気絶するシーンで立ちのぼる湯気の反復である。それは最終的に庭で何か燃やしながら語らう老夫婦のシーンにつながっていく。つまり、過ぎゆく時間のはかなさ、かけがえのなさであらわしている。

いっぽう、細田作品では水平に移動する人、自転車、車が頻出する。これも時間をあらわしている。また、球体、円形物もたくさん出てくる。これらはこのアニメに限らず、細田守の作品全般に頻出するイメージでもあるので、別の機会にじっくり論じたい。

17. カク、204 を参照。また、量子論の世界ではテレポーテーションの実験に成功しているという。しかしこれは現段階では物体移動ではなく、情報の移動にすぎないので、アニメのえがくタイムリープとかけ離れており、考察の対象から除外した。カク、211-16；ダーリングを参照。

18. 筆者はエヴェレットの論文をネット上で入手して読んだが、細部は半分くらいしかわからなかったことを告白しておく。「まったく同じ」というのは、グリビンに負っている。しかし、それでも、エヴェレット解釈もまた「猫」のもつパラドクスを逃れ出していないと考える。多重世界のなかには主流派の考える世界、すなわち「生きている猫」と「死んでいる猫」が「重なり合った状態」の世界があるはずだからだ。

19. グリビン「下」、127-8. カク、180-81、206 を参照。

20. Site I の Q 1.3.2 を参照。多重世界解釈の一種を採用している。

21. Site I の Q2.S.93.3 が一つの解釈を示しているが、作品外部の想像でしかなく、受け入れがたい。

22. アニメ版《時をかける少女》にはいくつか時間を整理して図表化したページがある。下記はその一つだが、問題のタイムリープに関して筆者とは異なる解釈をおこなっている。<http://www5b.biglobe.ne.jp/~kouji/tokikake1.pdf>むしろ Site I の Q2.S90.5 が正しいと考える。

23. 「猫」の絵はクルミ装置について話している途中に挿入されている。

24. 念のために記しておく、未来でこの絵の所在が知られている季節は春である。だから千昭は春に「転校」してくるのである。しかし修復中で見ることができないことを知り、がっかりして未来へ帰ることも考えるが、三人で過ごす毎日の時間が楽しくてずるずると過ごし、博物館に通ううちに夏を迎えるのである。

25. 過去を語る魔女おぼさんの背後に女子高校生を挟んだ男子高校生二人の写真がうつされる。そしてそのわきにはラベンダーの花が飾ってある。大林版《時をかける少女》へのオマージュであろう。ただし、魔女おぼさんの語る過去は筒井の小説とも大林の映画とも完全に符合するものではない。

26. 一部には、ルールによって自殺したのだという解釈もあるようだが、深刻すぎてとても受け入れられない (Site I の Q2.S95.5 を参照)。それでは前節で指摘した真琴の倫理的欠点はますます大きくなってしまふ。

27. 岡田斗司夫はこの点を指してアニメ版《時をかける少女》をセカイ系の作品だと語る。ただ、生放送の発言をそのまま活字にしているだけなので、論旨が明快でない。ここでの論評は控えることにする。BS、79-80 を参照。

28. この点では魔女おばさんも同罪である。

29. 大林映画で最後のタイムリープのときに和子が見る過去の走馬灯に対応している。

30. たとえば Site D を参照。

31. その一つには、ルールの窮屈さ、どん詰まりまで来た物語の閉塞感を打ち破る快感も含まれるだろう。

32. これらの様々な解釈については Site C の 101 と Site G を参照。

33. 脚本段階ではこのシーンについて、千昭は「聞こえないように何か言う」と書かれていた。しかしそれではダメだということになり、細田監督はとても苦しんだ末に「未来で待ってる」という言葉にたどり着いたという。NOTEBOOK、44 を参照。

34. 記憶に関するこのパラグラフはベルグソンの記憶論を筆者が独自に敷衍したものである。アンリ・ベルグソン『物質と記憶』合田正人・松本力訳（2007年、ちくま学芸文庫）の第三章を参照。

参考文献とサイトの一覧

■小説と大林作品について

・江藤茂博 『「時をかける少女」たち：小説から映像への変奏……』(2001年 彩流社)

■細田守作《時をかける少女》について

・『B S アニメ夜話 vol.9 時をかける少女』(2008年 キネマ旬報社) (BS と略記)

・『時をかける少女 NOTEBOOK』(2006年 角川書店) (NOTEBOOK と略記) 他に下記の HP を参照した。

Site A) http://b-kan.at.webry.info/200607/article_8.html

Site B) <http://d.hatena.ne.jp/GiGir/20080719/1216431064>

Site C) <http://alfalfa.livedoor.biz/archives/50987422.html>

Site D) <http://dokuani.web.fc2.com/ta/tokikake.html>

Site E) <http://movie.maeda-y.com/movie/00760.htm>

Site F) <http://sleepydog.fc2web.com/text/tokikake.html>

Site G) <http://soudan1.biglobe.ne.jp/qa4199168.html>

Site H) <http://tec.jpn.ph/tokikake/resource/tokikaketime.pdf>

Site I) <http://tec.jpn.ph/tokikake/tokikakefaq.html>

Site J) <http://tokyojoe.asablo.jp/blog/2006/08/19/491363>

Site K) http://www.accessup.org/janime/7_Toki_20O_20Kakeru_20Shojo/

Site I は Q&A になっていて、ネット上の様々な意見や解釈を集約してくれていて便利である。

■量子力学について

・グリビン、ジョン『シュレーディンガーの猫』(上)(下) 山崎和夫訳 (1989 年 地人書館) (グリビン「上」などと略記)

・グリビン、ジョン『シュレーディンガーの子猫たち』櫻山義夫訳 (1998 年 シュプリンガー・フェアラーク)

・五十嵐靖則『量子力学の世界がわかる』(2003 年 ベレ出版)

・小出昭一郎『量子力学のはなし』(1983 年 東京図書)

・カク、ミチオ『パラレルワールド』斉藤隆英訳 (2006 年 日本放送協会)

・ダーリング、デヴィッド『テレポーテーション：瞬間移動の夢』林大訳 (2006 年 光文社)

・湯川秀樹ほか『素粒子』第二版 (1969 年 岩波書店)

■エヴェレットの論文は下記の HP で入手できる。

・1957 年の論文

<http://www.univer.omsk.su/omsk/Sci/Everett/paper1957.html>

・1965 年の dissertation

<http://www.pbs.org/wgbh/nova/manyworlds/pdf/dissertation.pdf>